

令和4年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会 議事録

○日 時：令和4年7月6日（水）15:00～

○場 所：仙台市役所本庁舎2階 第2委員会室

○出席委員：高浦康有委員長、佐々木綾子副委員長、石田祐委員、岩間友希委員、
加藤隆委員、小林幸司委員、佐伯恵子委員、庄子康一委員、高橋由佳委員
傳野貞雄委員、春由美委員、

○欠席委員：なし

○事務局：市民局長、市民局次長、市民活躍推進部長、市民協働推進課長、
地域政策課長、市民活動サポートセンター長、市民活動推進係長、
連携推進係長、他担当職員

○次第

1 開会

2 議事

- (1) 若者が活躍するまちづくりについて（意見交換）
- (2) 若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について

3 その他

4 閉会

○会議内容

1 開会

[事務局（市民活動推進係長）]

ただいまから令和4年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会を開催いたします。議事に入ります前に、当委員会の定足数を確認させていただきます。本日、石田委員が少し遅れいらっしゃるようですが、現時点では11名中10名のご出席をいただきしております、出席が過半数を超えておりますので、仙台市協働によるまちづくりの推進に関する条例施行規則第4条第2項の規定に基づき、会議は成立いたしますことをご報告申し上げます。

それでは、ここからの議事進行は高浦委員長にお願いいたします。

[高浦委員長]

皆さん、こんにちは。足元が悪い中、また蒸し蒸ししている中お集まりいただき、ありがとうございます。今日は東北福祉大の千葉さんと、以前当委員会の委員をお務めだった渡邊さんに、最近の活動などのお話を聞いていただけるということで、楽しみにしております。

まず、議事録署名人ですが、今回の署名人は五十音順によりまして岩間委員さんにお願いしてもよろしいでしょうか。よろしくお願ひいたします。

2 議事

(1) 若者が活躍するまちづくりについて（意見交換）

[高浦委員長]

それでは、議事に入らせていただきます。議事は2つありますけれども、前半1時間ほど使わせていただきまして、1つ目、「若者が活躍するまちづくりについて」です。初めにゲストスピーカーとしてお越しいただいたお二人にこのテーマに関連する話題提供をいただいたのち、その内容をきっかけやヒントとして意見交換をしていきたいと思います。今回の企画は、前回の委員会で高橋委員からぜひ若者の方をお招きしてはどうかというご提案がありましたので、実際に活動されていらっしゃる千葉さんにお越しいただいております。では、事務局からご紹介をお願いいたします。

[事務局（市民活動推進係長）]

本日はゲストスピーカーといたしまして一般社団法人ワカツクの渡邊一馬代表理事、それから東北福祉大学総合福祉学部社会福祉学科3年の千葉優花さんのお二人にお越しいただいております。渡邊代表には、若者と地域をつなぐコーディネートや、地域社会の課題解決を目指した若者主体のプロジェクトの支援などを行っている一般社団法人ワカツクの代表理事として、普段から若者と接している中で感じいらっしゃるまちづくり活動に対する若者の意識や現状についてお話をいただきます。また、東北福祉大学の千葉優花さん

は、学生へ食糧支援などをしている「はぐね」という団体に最近参加し始めたということです、本日は現在の活動内容や活動を始めた経緯、やりがいなどについてお話をいただければと思います。それでは、よろしくお願ひいたします。

[渡邊一馬氏]

始め10分間ぐらいで私からお話しさせていただき、その後千葉さんから最近参加をされた「はぐね」という活動の紹介と、参加した動機などをお話いただきたいと思います。

私はワカツクのほか、せんだい・みやぎN P Oセンターという中間支援団体の代表もしております。他にも、最近立ち上げがあった中間支援団体であるまちづくりスポット仙台の副代表理事などもしております。また、いろいろご縁があって、日本財団のボランティアセンターの理事や、大学の非常勤講師などもしております、比較的若者と出会っているかなと思います。ただ、会っている若者にかなりバイアスがかかっているということは承知をしておりまして、一般論かどうかはちょっと置いておいて聞いていただければと思います。私自身がやっていることを少し説明すると、課題解決型人材の育成のための環境をつくるといったことを、20年間ぐらい取り組んできております。メインでやっているのは、地域の会社やN P Oに対してインターンシップを受け入れていただくといったことを、最近は私たちワカツクだけではなくて東北の仲間たちと連携して取り組んでいまして、毎年100社前後の会社に200人から300人ぐらいの若者たちを実践型のインターンシップでおつなぎするということをしています。ご当地仙台だと10社前後に、仙台の学生のほか全国の学生も休学やこのご時世なのでオンラインの形で参加しています。2週間ぐらい前までやっていたインターンシップの終了報告会では、地元の大学の学生と東京の2人に活動の発表をしてもらったりしました。あと、仙台市とコカ・コーラボトラーズジャパンとワカツクとで若者の活動を表彰するという仙台若者S D G sアワードを6年前からしています。これは今日お話しすることの根底にもなっていますが、若者はもともと活動をしたがっているのだけれど、それを止めているのは大人側であるということなので、表彰したりすることを積極的に受け入れていきましょうということで取り組んでいます。若者アワードを通じて、新しい社会貢献活動を生み出したりもしております、一昨年はサイコーをはじめとしたエスケーホールディングスと大学生のグループが連携して、古紙回収で寄付を集め、そのお金を子ども食堂に寄付をするという取り組みがありました。言ってみたらとっても回りくどいことですけれども、こういった若者たちの意識を知ることもできますし、企業側が社会貢献活動を若者と一緒に取り組むことに対する意識を広げていくことにもつながっています。昨年度はお茶の井ヶ田と東北医科薬科大学の学生たちが、孤立防止のための図書館を始めるという活動を始めましたし、今年度はオフィスベンダーから提案があった、学都仙台の若者の「学び」を文具を通じて応援する仕組みづくりをテーマとして、取り組みを進めています。

本当に当たり前の話ですが、まちづくり活動に参加する若者というと、大きくは学生と

若手社会人になるだろうと思います。学生に関しては、社会貢献の意欲というのがあります。特に今の大学生たちは、震災の経験があるものの小学校の低学年だったため、自分たちはあまり活動ができなかつたという感覚を持っている方が結構いらっしゃいます。そのため、行動力もあって自由な時間がある大学生ぐらいになったときに「やっぱりやってみたいな」ということと、これはだいぶこの5年ぐらいで変わってきましたけれども、いわゆるサークル活動の代わりにまちづくり系の活動に参加をするという学生も増えてまいりました。あとは、コロナ禍で大学が公式的にはサークル活動を禁止しているなかで、学外の活動であれば参加できたので、友達づくりと兼ねて参加した活動が結果的にまちづくり活動だった学生たちもいたと思います。根底にあるのは、学びにしたいという意識だと思います。逆に学びを感じられないような活動は、1回か2回は行くけれどもやめていく。面白くないとかコスパが悪いとか言い方はいくつかありますけれども、学びにならないと学生たちは離脱していくということかなと思います。若手社会人になりますと、社会貢献ということもありますが、ネットワークづくりとか人脈づくりを期待して参加している方が多いようです。仙台の特徴である転勤でお越しになる若者は、会社と自宅しか居場所がなくて、そういう方が受け入れられる場所がボランティア活動ぐらいしかないということもあるってそういう視点で参加する方も結構多いかなと思います。あとは自分の力を試したい、例えばマーケティングの仕事をしているとかインスタの運用をしたことがあるからボランティアとして社会貢献活動を手伝いたいというような、ある意味では兼業的にまちづくり活動に参加をされるという方々もいるかなと思います。本業はインターン屋なんですが、4年ぐらい前から副業・兼業のコーディネートということもするようになって、そこに応募してくる20代後半から40代前半ぐらいまでの方々というのは、お金を稼ぎたいということよりは自分の能力を生かしたい、しかもそれを生かすんだったら社会に、地域に、もしくは将来に役に立つということに対して自分の力を使いたいという方がいらっしゃるので、これは変化だなというふうに思っています。

とはいって、まちづくり活動と言ってしまうと、何となく大人側が望んでいることに学生や若手社会人を連れて来ようみたいに見えててしまうので気持ちが悪いなというふうに思つていまして、大抵の若者がやっているテーマというのは今の大人に不都合なものなので、大人である私たちはそういうことに向き合う覚悟はあるのですかと。そういうことに向き合っていなのに若者が参加しないと思っているから見向きもされていないわけです。最近、町内会活動に参加するようになったのですが、例えば安否確認を「外に出て、お互い顔を見せ合って安否確認するのは、現代的でないので、LINEでいいじゃないですか」と言ったときに、1回目は皆ポカーンとしていまして、2回目ぐらいは「好きにやれ」と言われましたが、やっぱりどうしても既存の側はこれまでのやり方がいいので、変わることはちょっと怖いなというふうに思うのではないかなと思います。それをすごく感じたのは、今年の春先に東北大の学生が仙台市水道局に生活困窮者のライフラインを止めないで欲しいといった申し入れをしたのですが、これを見た僕らの同年代ぐらいの方々が

ネットで叩いていたんですよね。でも彼らは自分たちがお金を払えなくなったときに水道が止められる世の中というのは怖いなと思ったから動いたということを、私たちは受け止められるのか。ほかにも、仙台の若者の事例ではないですが、「さんぽセル」というキャリーをつけたランドセルを、大人たちが「私たちだって重たいもの背負ったんだから」といった呪いのツケ送りをしたがるんですけど、若者たちはそういった呪いから脱却したいので、何らか新しいことをやりたいと思っていると。それを私たちはどう見れるのかというところが試されてくるのではないかというところでございました。一旦ざっと課題意識とかもお話をさせていただきましたので、ここからは千葉さんにバトンタッチします。

[千葉優花氏]

「若者が活躍するまちづくりについて」お話しする機会をいただきましたので、10分程度でお話しできればと思っております。目次といたしまして、「自己紹介」「学生支援団体はぐねについて（現在の活動）」「活動を始めた経緯」「活動を通して感じたこと（やりがい/課題）」「今後の活動について」という流れでお話をさせていただきます。

簡単に自己紹介させていただきます。私は、出身が宮城県の登米市です。大学、学年は東北福祉大学に現在所属しており、3年生です。総合福祉学部社会福祉学科というところで、社会福祉士の資格を取れるようなコースに所属しております。1年次の時点では、教育学部ということで小学校の先生になりたいというところで教育学部に所属したんすけれども、学びたい分野が変わって、学部を変える試験を受けて、現在は総合福祉学部に所属しております。サークルはボランティアサークルに所属しています。趣味は風景画の作成だったり、あと散歩をしたり、最近では水根栽培といって、部屋に緑が欲しいなという気持ちから、虫がつかない水根栽培を始めてみました。

ここから、学生支援団体「はぐね」の説明に入らせていただきたいと思います。こちらの資料は、「はぐね」の学生代表の方からお借りした資料になります。活動概要といたしましては、2020年に設立された団体で、毎週水曜日に無償で食糧を支援しています。立ち上げの背景としては2つあります。1つ目が、コロナ禍でアルバイトのシフトが削減され、経済的な困窮に悩む学生の急増というところです。2つ目に、オンライン授業・自粛により人との関係が希薄化し、悩みを1人で抱える学生が増えたというところも影響があります。食糧支援をすることで、食糧の受け取りが外出のきっかけとなり、渡す際のコミュニケーションで精神的な負担も軽減できるのではないかと考えたというお話でした。

活動母体については、現在、実働は7名です。2020年11月から2021年7月、一般社団法人ワカツクが採択された助成金のほか、クラウドファンディングや寄付金、企業の備蓄品の提供、ほかのボランティア団体からの提供というところで、現在の食糧支援の活動につながっております。

活動実績としましては、現在、毎週水曜日に食糧支援をしているということですが、以前までは月曜日にも食糧支援をしており、活動は現在よりも多かったようです。あと、ラ

イオンズクラブさんとの共同提供事業では、3回にわたり、延べ1,047人に食糧を提供してきました。また、メディアでの取材対応もあったようで、このときは私はまだ所属してはいなかつたんですけども、「めざましテレビ」や「チャージ!」、新聞などにも取り上げられたことがあったようです。

これから、私自身が活動を始めた経緯ということでお話しさせていただきます。私は、もともとボランティア活動に興味がありました。中学校3年生で初めてボランティア活動に参加したことをきっかけに、そこからボランティア活動というものに興味があつて、分野は問わずなんですけれども、自分の力でも何かできることがあるというところにすごくやりがいを感じて、そこからボランティア活動に興味を持ちました。学生を対象として活動を行う団体を探した理由としては、私自身もコロナウイルスの影響を受けて、アルバイト先が閉店してしまったりとか、あとはオンライン授業がほとんどとなってしまったので、学校外での交流というのもほとんどなかったので、自分自身の交流の場を広げるためにも、学生を対象として活動を行う団体を探していました。また、「はぐね」は学業と活動の両立ができそうな団体だなというふうに思いました。毎週1回の活動で強制参加ではないというところが、私的にはとても続けやすそうだなという活動内容だったので、無理なく学業と両立できそうだと思い参加したいと思いました。そこで、2022年4月13日に説明会に参加させていただき、そのまま所属という形になりました。私が参加した活動はまだ1回ではあるんですけども、5月にフードパントリーというライオンズクラブと協働で行っている食糧支援の活動に参加させていただきました。

次に、活動を通して感じたことです。やりがいと課題を何点か挙げさせていただきました。やりがいとしては、食糧支援をしたときに「ありがとうございます」だったり、小さい子供の「ありがとう」という言葉だったり、感謝の言葉を直接聞くことができるというところで、うれしいな思つたり、やりがいを感じました。あとは、参加することで私自身の人との関わりが増えたり、交流の場になつたりするので、自分自身の居場所になるという点もやりがいであります。私自身が活動に参加するメリットにもなるのだなというふうに思いました。人に何かをするということが自分にもプラスの形として返ってくるというの、すごくボランティア活動のやりがいだなというふうに思っています。課題として、2点。私自身もこれから就職活動が本格化するので、大学1・2年生のほうが参加に対して都合のいい日程が多いのかなと思うんですけども、ボランティア活動なので強制参加ではない中で、メンバーを固定化させないというところがとても難しいのかなというふうに感じました。また、本当に助けを必要としている人に支援が届いているか分からぬといふところも課題に挙げさせていただきました。「はぐね」が発信した情報を受け取った方が食糧提供の場に来ると思うんですけども、その情報を知らない人がいるというところを課題に思つていて、もう少し何かアプローチできたらいいのかなというふうには感じております。

今後の活動についてです。今後の活動も、これまで同様水曜日の食糧支援と、ライオン

ズクラブの方々との共同提供事業になると思います。活動の継続というところがすごく大事だなと思っていて、新型コロナウイルスの影響で活動を中止するボランティア団体がすごく多いなというふうに感じている中ではあったんですけども、「はぐね」は新型コロナウイルスをきっかけに立ち上がった団体ということで、感染の拡大状況を見ながら落ち着いてきたら提供の回数を増やすなど、何らかの形で食糧支援を必要としている人に対する支援を継続させていくことが大事だなというふうに思っています。できることをできる範囲で継続させていくというのが今後の活動では重要だと思いました。ご清聴ありがとうございました。

[高浦委員長]

とても誠実な思いを持って日々活動されてらっしゃる様子がよく伝わってきました。千葉さんのお話の中にありましたけど、誰かのためになることが自分のためにもなるという、そうした形でご自身が居場所を見つけられてきたというのがとても幸福なことなんだろうなというふうに改めて思いました。また、渡邊さんからは大人の価値観の押し付けになつていないかと、大人が望んでいることに若者を動員するようなことになつていないかという、とても重要な示唆をいただきました。時に大人にとっては不都合なことも突きつけられるよという、そこをどう受け止めしていくのかが大事だというお話をいただきました。それでは、お話しいただいた内容を参考にさせていただきながら、「若者が活躍するまちづくりについて」をテーマに意見交換していきたいと思います。意見交換をさせていただくに当たっての視点としては、例えばまちづくりに興味はあるがまだ行動に移せていない若い方たちがいらっしゃるならば、必要な支援や、あるいはどういうふうにきっかけを与えていくのか。また、効果的なアプローチということで、「はぐね」の活動も若い人たちにどう情報を届けるのかという、それもテーマにされているということですが、まず被支援者となる若者にどう届けるのか、また、こうした支援の側に入っていたらにはどういうふうに伝えていったらいいのかとか、いろんな何層かにわたるような課題もおありかなと思いましたけれども、いかがでしょうか。このコロナ禍において、サークル、クラブ活動を停止させて、それで大学側はいいかもしれないけれども、肝心の学生を放っておいたままで、こうした学外での活動に本当にお世話になっているなというのを改めて思いました。自主的な活動をされている、それに大学がどう支援のほうで関わっているのかということを改めて考えさせられました。

[小林委員]

我々は環境団体としてボランティアを受け入れたりしているのですが、ここ数年、学生が環境団体に来ることが割と少なくなっていて、話を聞くといわゆるテーマを絞らないボランティア団体に行く学生のほうが多いという話を聞いていました、今お話を聞いて、やっぱりコロナ禍も少し影響はあるのかなと思いました。普通の学生生活だったり、

友達付き合いだったり、アルバイトだったり、そういうことがない中で、まず交流の場だったり、人とのつながりを求めるとなると、なるべく広いテーマのところに行くようになるのかなと思ったところです。あと、若者がやっている大人にとって不都合なものに向き合う覚悟があるかという話がありましたけど、そこは自分も考え直さなければいけないところだろうなというのはものすごく思っています。自分たちも昔はそうだったはずなんですけど、若ければ若いほど、思いがあればあるほど、理想論を持って活動に参加したり、その理想論に向き合うことによって、どうしたって回り道をしていくようになる。ある程度それを経験している大人はついつい口出ししたくなる。そうすると、やっぱり何言っても否定されるとか、結論を先に言われちゃうというふうになると、やる気もなくなっちゃうと思うんですよね。だから、そこは必要な回り道と一緒に付き合っていく中で、もしかしたら自分が思っていたのとは違う答えが出るケースだってあり得るわけなので、そういう思いをもう一回持って学生と向き合わないと、学生がただ興味を持たなくて来なくなっているわけではなくて、我々の側にもいろいろ問題はあるんだろうなというのを考えさせられたことも含めて、貴重な時間をいただいたかなと思います。

〔岩間委員〕

実践をされているからこそその言葉がいっぱい出たなと思って、現状もよく分かったし、すごく刺激になる言葉がいっぱいあって、うれしかったです。お話を聞いて思ったのは、町内会をはじめとする地域の方との得意分野のすみ分け、これができるようになると、より協働のまちづくりに一步進むのではないかということです。例えば、そもそもこれは本当に必要な人に届いているのだろうかという草の根の情報の届け方を、実は地域の町内会の方はたくさん情報を持っていたりする、だけどそこで学生団体と町内会のディスコミュニケーションが起きて、うまくいかないということだと思うので、だったらそこのコミュニケーションの質を改善してあげれば、すっといくんじゃないかということを感じました。私自身もボランティア活動の経験があるので、小さなありがとうという言葉が自分にとっての居場所になる、これは学生にとってもそうだし、実は町内会とかで頑張っている高齢者にとっても、居場所という意味で同じなんですね。だから、高齢の方にとっての居場所を逆に奪われるんじゃないかという心配が押し付けになってしまっていたりしているのかなとうふうに私は感じていますので、そうではないんだよと。「私はこっちのほうが得意だから、おじいちゃんたちはこっちのほうをやってよ」というふうに促せると、よりいいのではないかというふうに考えた次第です。それを言いつつ、理想論だなと自分で考えながら思っていました、対話のプロ、コミュニケーションのプロを独自で仙台市として育てるようなプログラムを何か一つ設けたらいいのではないかと思いました。これまででは間をつなぐ役割はいわゆるコーディネーターと呼ばれる職種の人がやってきているわけですが、すごく属人的だなと思っていた、特に教育プログラムがあつてやっているわけではなくて、何か本読んだり独学しながらなんとかやってきているというところがあるので、一般

の人にも門戸が開かれたそういったものがあると、より門戸が広がるのではないかと思いました。

[高浦委員長]

対話、ファシリテートのプロのような学生団体や町内会をつないでいくような役割の方をどう増やしていくのかということも確かに一つの課題ですね。先ほどの自分の居場所が奪われるかもしれないという、その心配があるかもしれないとか、そういう感情的なところにも目配りできるような、そういうファシリテーターの養成も必要ですね。渡邊さんはいろいろと場をつないでいくようなところがおありだなというふうに思っておりますが、いかがでしょうか。

[渡邊一馬氏]

仙台の特徴なのか、サポートすることばかりメニューにしようとするけれど、それではないのではないかなど私は最近思うようになっています。今岩間委員が言ったことも分かるのだけれども、コーディネーターとかファシリテーターを増やしても実際に自分で課題解決したことがないのに資格を持っていますみたいな人たちが増えに行く。例えば、中小企業診断士が免許だけ持っていて、借金したことないのに借錢している社長に「これじゃ駄目です」と言ったって分からんんですよ。同様のことがたぶんこの業界も起きているのではないかというふうに思っています。とはいえ、やっぱりコーディネーターを育成するのは大変だよねという話をコーディネーター仲間としていたときに、コーディネーターとしてやり続けている人とやり続けられない人の違いは、自分自身で事業をやったことがあるかとか、何か自分の実現したい社会があるからその社会をつくるためにコーディネーターという職種を選んだか、ただ何もなく透明な形でコーディネーターということだけ存在はしないのだなというふうには思っています。僕は若者には何でもいいから一旦自分で失敗も含めてやってみて、次どうするのかを考えてほしいと思っています。失敗が許されないと調整がしにくいということが息苦しさを生んで、失敗させないほうがいいと思って準備し過ぎてしまい何にも痛がらないまま終わってしまうと再現できなくなる。「はぐね」も、続けたいと言っているメンバーがいる一方で、立ち上げた面々はもう疲れたらやめたいと言っていて、でもそれも含め今度彼らが続けるにはこういうことをするんだとか、ディスカッションしていく中で学んでいくということが大切で、必要な回り道に大人や社会が付き合うということも大事だと思いつつ、でもどうやっていくかみたいなことを考えながら聞いていました。

[高浦委員長]

コーディネーターが得意な性格の方もいらっしゃるし、そういう方たちも入って一緒に汗をかきながら一つのプロジェクトを進めていくといった覚悟が誰しも必要だというメ

ッセージとしてお受け止めいたしました。

[岩間委員]

コーディネーターの育成についてですが、どちらかというと地域の方自らが対話が実践的にうまくなるというような意味合いで決して形骸化しやすいプログラムをつくるというニュアンスではなかったので、そこだけ1点修正させてください。

[佐々木副委員長]

若者にまちづくりに参画してもらうという言い方とか、それは何か大人としてはおこがましいなみたいなところは私自身も感じていたところがあります。私も子供支援をしていますので、子供たちの可能性とか考えていることは本当にすばらしくて、そもそも正解って何だろうみたいな、もうその正解を大人が今まで培ってきた価値感で決めつけるのは違うなといったところはすごく感じまして、私たち自身が今まで学んできたことをもう一回真っ白にして、若い人たちと一緒に私たちが教えてもらいながら、一緒にできることをやっていくみたいなところがとても必要なのかなということを、お話を聞いてとても感じました。あと、まちづくりという言葉はもしかしたらビッグワードなのかなというふうに思いました。まちづくりというとすごくぼんやりしていて抽象的で、やっぱり身近にあることを、何か社会貢献したかったとか、何かできることをしたかった、人とつながりたかったみたいなところから、結果、社会貢献になっていたり、自分の居場所になっていたりするんですよね。まちづくりとなると何をするのかといったところが分からなくなるのですが、自分たちの身近に活躍の場がたくさんあることが、結果、のちに道をつくっていくのではないかなということに気づかせてもらいました。千葉さんも含めて、もっといろんな若い方々のお話を聞かせていただきたいなと思いました。

[高浦委員長]

身近なところにいろんなそういうきっかけがあるということが、ゆくゆくは大きなまちづくりにつながっていくんだろうなと改めて思いました。あまり大上段に構えなくてもいいということですよね。

[高橋委員]

私たち大人は当たり前のことを見つけるというこの難しさというのがあると思うんですね。感謝の言葉がうれしいとか、人との関わりが増える、非常にシンプルなことなんですね。私たちはサポートするとかそういう何かフレームを押し付けているんだなという反省点が先ほどありました。実は若者は誰かの役に立ちたいと思っている方が本当にたくさんいて、誰かのためになることがうれしいという話も聞きましたし、サードプレイスを求めている若者は非常に多いなと思っています。居場所支援とかサードプレイスというと、どう

ちょっと脆弱でサポートが必要な学生というイメージがあるんですけれども、そうではなくて、誰もがやっぱりサードプレイスを求めてるんだということをすごく感じたお話をうななというふうに思っています。私たちが社会を見る目線というところでは、私たちが学生を集めのではなくて、学生の皆さんのがサードプレイスをつくる中に大人が入っていくという仕組みがもしかしたら自然発生的でとてもシンプルなものになるのかな、そこが小さな町内会のまちづくりとか、そういうところが点が面となっていくというふうになっていくといいなと。継続する難しさに対するヒントとなつたような気がします。

[高浦委員長]

日々サポート役で回られているように、改めて若者視点で、当事者視点でということの大切さをお伝えいただいたように思います。子供の目線を大切にされながら商店街活動をされている庄子委員、いかがでしょうか。

[庄子委員]

千葉さんのお話は本当に一生懸命動いているからこそその思いのこもった言葉だったと思います。私も地域で動いていて、何かしたときに「ありがとう」というのがやっぱり私も原動力になっています。あとは、この先下の学年にもつないでいきたいと考えているのもすばらしいと思いますし、自分が何を感じて始めたかや感じたことをどんどん伝えていたら、一過性で終わらせずにつないでいけるのではないかなと思います。

また、渡邊さんから呪いからの脱却というお話がありましたけれども、私も活動していて、例えば商店街で組合に入っていないお店の方に対して、組合に入っている理事の方は「あそこは何回行ってもいつも断るから、行かなくていいんじゃないかな」と言われたもの、伝えてみると意外と感謝されてぜひお願いしたいといったことがありました。何年前にというのが10年前だったり、何回もといつても3回だったり、大人でも私自身も10年前には気づけていなかったことが年数を重ねることで10年後に気づくこともありますし、それは学生も同じだと思うので少し長いスパンで見るということも大事だと思います。何かチャレンジしたいということで行動することすべてが失敗でも成功でもこの先のために必ずつながると思うので、大人も学生も同じ目線で何か一緒にものをつくりしていくという部分がとても大事なのではないかなと思っています。あとは、今「子まもりプロジェクト」というのを荒町エリアでやっていまして、地域にある資源として町内会、小学校、児童館、商店街、企業、警察など様々な機関の強みを生かし補い合って、子供たちの防犯をそれぞれの視点で様々なアプローチをしながらつながりをつくっていくということを、「こういうことやりたいので、一緒にやりませんか」っていうのを1軒1軒お話しに行く形で、私自身もつなぎ役となって動いております。来年、東北学院大学も移転して来られますし、東北福祉大学の方も今日ちょうど社会福祉協議会の研修もあって一緒に参加されたんですけども、今楽しみなのは学生も同じ代表として「子まもりプロジェクト」の1団体として、

一緒に活動するのを来年度から進めていきたいなと思いますので、そういう面でもやっぱり対等の立場というか、それぞれの強み、学生の強みもあるというところで、私自身も取り組んでいきたいなと今日改めて思いました。

[高浦委員長]

自分たちが住むまち、町内会を含め商店街で、そうしたボランティア的に小さいお子さんの防犯の活動に関わるといったきっかけがあると、それこそ自然なサードプレイスがその場ででき上がるという感じがして、とてもいいですね。

[加藤委員]

皆さんからお話をあったコーディネーターですが、たぶん最初にやった方たちというのはそんなつもりではなくやってきて、後からそれがコーディネーターだったということだったりするのかなと感じていて。例えばSDGsという言葉も商店街の中で活動しているとSDGsの活動を昔からやっているから店が続いているのであって今さらSDGsと言われてもという感じがあると思うんですね。何となく大人が勝手に分かりやすい言葉にしてしまって、若者、学生たちにそれを「これがコーディネーターの仕事だ」「これがSDGsだ」とかいろんなものを押し付けてしまっているようなところがやっぱりあるんだなというのは何となく感じました。私はもともとゼビオという会社にいまして、そこに入ったきっかけが、お客様と接して「ありがとう」って言われたいから小売業をやりたいというのも一部ありましたので、改めてその「ありがとう」という言葉は人をつなぐいい言葉だと思いますので、まちづくりだとか地域活性化とかいろんな言葉がありますけれども、単純にそれはもうすべて「ありがとう」で集約できるのかななんていう感じで受けていました。あと、今日ここに来る前に仙台南高校で地域課題研究の授業がありまして、長町にある企業、JRや商店街など全部で10団体くらいが学校に行って、各クラスで地域ではこんなことを今悩んでいるんだよということを子供たちにぶつけて、これから半年かけて高校生たちにその課題解決の提案をしてもらうと。今年で3年目になるんですけども、子供たちも一生懸命やっている中で、提案してくださいと言しながら実際それが絵になっているものがどれだけあるのかというと、大人のしがらみの中でそれは駄目だとかできないこともありますので、受ける側がどういうふうにちゃんと若者を受け入れてあげるのかというところが大事なのかなというのは、改めて今日も感じました。

[高浦委員長]

最近SDGsについていろんな大学のリソースも使いながら、どうやって課題解決できるかということを本気で考える学生団体も生まれてたりしますので、それこそ学生の鋭い突っ込みとか課題提示に期待したいなというふうに思ったりしております。

[傳野委員]

我々は60歳で大体定年だった時代で、定年を迎えた方々が町内会に入ることが多かったので、私も誘われて町内会に入ったのですけれども、今地域で悩んでいるのは、65歳以上の方が人口の過半数を超えるいわゆる限界集落になるのではということなんです。私が住んでいるパークタウンでは、マンションが建っているところは若い人もいるのですが、やはり高齢者が多いので、何かやろうと思っても若手が足りないと悩んでおります。我々は商店街とは悩みの内容が全然違って、町内をどう動かすかということは、年寄りが楽しく生きててよかったというまちづくりというのが念願でやってはいますが、子供たちにも目を向けなければならぬということで、お祭りを必ずやりたいなと思っています。ただ、コロナの関係でやれなくなっているというのが現状です。町内会で子供たちに喜んでもらうために何かやろうといったときに、手足になるのが大体60歳前後の班長と役員になってしまふので、それが一番のネックです。皆さんに喜んでもらうために阿武隈川や水族館に遠足に行ったりするのですが、宮城大学や地域包括支援センターの看護師に一緒に行ってもらうと、いつもの顔ぶれだけだと病気の話と友達が亡くなった話ばっかりになってしまふから、若い子が来てくれることで「とっても楽しかった」って言ってくれるんです。なので、若い子とお話しするということの機会をぜひつくっていただければ、我々は絶対に抵抗なくすんなり受け入れさせていただいております。町内会にぜひどういうことをしたいかというのを、簡単に言うと、泉区のまちづくり推進課でも6大学と一緒にいろいろな機会をつくっていたりもしますし、そういうボランティアサークルがあれば教えていただいて助けていただきたいと思いますし、やっぱり協働でやれる社会が築ければいいなと思いました。

[高浦委員長]

まちづくりは本来的に多様な世代が集って一緒にまちをつくるということが意義だと思いますので、多様な世代が集まる、若い学生団体がいろいろとその場に関わることで高齢の方にとっても生きがいの場となっていくという、本当に循環になるんだろうなと思いました。

[春委員]

社会福祉協議会では中学生以上を対象に夏のボランティア体験会という事業をやっておりまして、ちょうど土曜日、日曜日、月曜日の説明会でした。コロナの前は600人ぐらいの申し込みだったのですが、今年度は1,037名の申し込みをいただいておりました。渡邊さんのお話しにあった「若者は活動したがっていると思う」というのは、非常にそうだなというふうに思っているところです。説明会のなかでは千葉さんがおっしゃっていたように、ボランティアをすると人との関わりが増えるとか、人のためというのが自分のためにつながるといった説明をさせていただきました。大学生の方など若い世代の方が自分の

活動内容をお話してくださると参加する側は安心しますし、一緒にやってみようかなというきっかけづくりになるんだなと、改めて今日思わせていただいたところです。また、先ほど千葉さんが課題として本当に助けを必要としている人に情報が配信されているか、工夫が必要かなという話をいただいて、それはいろんな場面でも思います。本会で支援している子ども食堂の方が大学生向けにフードパントリーをしたもののが残念ながら誰も来なかつたという現状がありまして、大学生の皆さんと何かコラボできたら、もっと広く受け取る人にちゃんと思いを届けられる事業になったかなというところがあるので、今後繋がれたらいいなと思っておりました。

渡邊さんからお話のあったエスケーホールディングスから子ども食堂に支援をいただいて、受け取りの授与式をさせていただいておりました。何かすごい縁がつながっているなと思いながら、伺わせていただきました。

[高浦委員長]

社会福祉協議会という公的な組織も、いろんなセクターをつなぐとても大事な結節点としての役割を果たされていると思うので、ぜひ支援、被支援それぞれの方たちをつないで、情報が行き届くようにぜひ工夫いただければと思います。

[佐伯委員]

東北福祉大学には20年ほど前に大学祭に行ったことがあって、すごく活気があってにぎやかだったのを覚えていましたので、コロナ禍では学生さんがほとんどいなかつたというのがとても残念に思いました。それが今再開されて、つながりが始まっているときなのかなと思いますので、発信の仕方ではボランティアのお仲間を増やせるのではないかとうふうに思いますので、できることをできる範囲でというのはすごい当たり前ですが、できそうでできないことなので、それを忘れないで続けていたら、たぶんお仲間が増えるのではないかというふうに感じました。ぜひあまり気負わないで、続けていけたらぐらいの気持ちがいいのかなと思いました。それから、町内会の活動もしていまして、町内会について先ほどからいろいろお話はあったんですけども、町内会によって構成メンバー一や立地によって全然状況が違うと思うんですね。高齢者が居場所として町内会の役職をやりたくてやっているというよりはやる人がいないので、うまく若い世代につなげていきたいと考えていてぜひ参加してくださいというスタンスでやっているところが多いのではないかなと思います。学生が多いまちでしたら、会費を払ってもらうのがすごく大変なことだとは思うんですけども、どんどん学生にも会員になっていただいて、その中で活動していただけるのではないかと思います。私たちのところは今までですとお年寄りがやっていた係を30代、40代の方が率先してやってくださっていて、別に強制しているわけではありませんが、雰囲気ができてきてるのかなと思っています。その地区ごとにだいぶ状況は違うので、確かに限界集落ということはあり得るかもしれないんですけども、その

中でのさらに世代交代、80代から70代、60代とうまくつなげていければ、若者の方もうまく取り込めるのではないかというふうに感じました。

[高浦委員長]

本当に多様な世代で世代交代、バトンタッチができる中で学生の関わりもあったりということだと思います。そんな意味でも、若いときからボランティアとか、きっかけがあると参加しやすいんだろうなと思いました。

[石田委員]

最近まちづくりにもなかなか参加する学生がいないとか、2年間ボランティアセンターもないで、実は学生もどういうふうにして出ていくのかというのを考えながら、とは言いながら、委員の皆さんをはじめいろんなところで学生と一緒に参加させてもらっていて、そういう意味では受け入れてくださる方々がたくさんいて、大変ありがたく思っているところです。いくつか千葉さんに質問させてください。参加する団体を探したという話があつたんですけど、どういうツールで、どういうふうにして探したのか、もう少し具体的に教えてください。

[千葉優花氏]

探し方は、私は学生を対象としているボランティア団体を探していたので、まずはインターネットで「仙台市 学生を対象としたボランティア団体」のような感じで検索しました。そこでいくつか出てきたんですけども、その中で一番ピンと来た理由といたしましては、食糧支援をしているという活動の内容がすごい分かりやすくて、自分が活動をしたときどういう活動をするのかというのが想像しやすかったというところが一番自分がここに所属してみようかなという決め手、きっかけにはなりました。

[石田委員]

あと、千葉さんの周りの人は千葉さんと同じような雰囲気なのでしょうか。友達と一緒にやろうと思ったのか、1人でやろうと思ったのかもそうですし、周りの子たちも探しているけど見つからない子たちが多いのか、もし状況を知っていれば教えてください。

[千葉優花氏]

私の友人もボランティア活動に興味を持っている学生が多くて、それも東北福祉大学でボランティアサークルが多いということが関係していると思います。学生を対象としたボランティア団体探しは私個人でやったことであって、私は興味があることに対して自分1人でも探してそこに行ってみたり説明を聞いたりすることができるタイプなので、この活動に関しては1人で参加を決めて、説明会を受けました。

[石田委員]

ちなみに、周りの学生もやっぱり探している子は多いんですか。

[千葉優花氏]

そうですね。どのような活動をしたいかというところでは一人一人様々かなとは思うんですけども、1人で活動しづらいという学生もいると思うので、集団で参加できるようなボランティア活動があるといいのかなというふうには思います。

[高浦委員長]

いろんな形でつながりを見つけたいと思っていらっしゃる若い人が多いという、そちらの思いに素直に応えられるような大人社会でありたいなというふうに改めて思いました。ぜひ今後も千葉さんご自身も活動の幅を広げていただいて、将来のキャリア形成にプラスになればいいなと願っております。改めまして渡邊さん、千葉さん、本日はありがとうございました。

ここで10分ほど休憩を入れまして、議事の2つ目に進みたいと思います。

～休憩～

(2) 若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について

[高浦委員長]

続きまして2つ目の議題、「若者のまちづくりへの参加等に関する実態把握調査について」です。事務局から説明をお願いします。

[事務局（市民協働推進課長）]

資料2をご覧ください。初めに概要でございます。この調査は、本市の学都としてのポテンシャルも生かしつつ、社会人も含めて多くの若者の皆様にまちづくりの担い手として力を発揮してもらえるよう、若者の意識や現状を把握するためのアンケート等を実施いたしまして、若者のまちづくりへの参加をさらに推し進めるための新たな事業展開を検討することを目的として実施いたします。調査の実施に当たりましては、前回の委員会でもまちづくりに興味関心があるものの活動にまでは至っていない若者の思いを後押しするような取り組みが必要なのではないかといったご意見をいただきましたので、活動の一歩手前にいるような若者に対するアプローチについて特に重点を置きまして、活動する若者の裾野を広げるような施策の検討につなげていきたいと考えております。続いて実施内容についてでございます。この調査は、アンケートの実施とワークショップの開催、この2つを両輪に実施したいと考えてございます。まず、アンケートの実施についてでございますが、

まちづくりに取り組むことへの若者の意識や現状、情報収集の方法を調査いたしまして、若者まちづくりへの参加を進めるための新たな事業展開の検討や、活動に興味関心のある方々への効果的な情報発信方法、アプローチのヒントにしたいと考えてございます。調査対象は、前回の委員会でもご紹介いたしました市民協働推進課で取り組んでおります若者ラボや若者アワードといった若者が活躍するまちづくり事業の対象としております18歳から39歳の方といたしまして、住民基本台帳から無作為抽出いたしました仙台市民3,000人といたします。対象者宛てに文書を郵送いたしまして、二次元コードを介しましてみやぎ電子申請サービスによるウェブでの回答をお願いする予定でございます。

続いて、裏面をご覧ください。調査項目は、記載のようなものをイメージしております。まず、基本的な属性といたしまして年齢と職業をお伺いした上で、まちづくり活動への興味関心の有無、そして活動の経験の有無から活動層と関心層を割り出したいというふうに考えてございます。次に、まちづくり活動の経験者に対しまして、まちづくり活動をしたきっかけ、例えば先ほどの千葉さんのように自分の自発的な意思からなのか、もしくは友人に誘われたからなのか、もしくは職場で参加する機会があったからなのか、またはイベントで参加したものがきっかけなのかといったことを伺うことで、関心層に対する効果的なプロモーションなどに生かしたいと考えてございます。また、先ほどのご議論の中でも若者は活動したがっているということがございましたが、であれば、それを行動に移すに当たって、例えばまちづくり活動に参加することへの阻害要因についてお伺いしたいと考えております。先ほど強制的かどうかというお話もございましたが、例えば一旦始めてしまうとやめることが難しいといったことが阻害要因になるのかとか、その活動に時間が取られ過ぎてしまって、日常生活に支障が出てしまうといったこと、もしくは一緒に参加する友人ですか仲間がいないとか、そういったところをお伺いできればというふうに考えているところでございます。また、活動する若者が増えるために必要だと思うこと、これについても、例えば日常生活の中で無理なく活動に参加できるかどうかといった時間的な面からの選択肢や、もしくはまちづくり活動を気軽に体験できる機会があればいいのかとか、もしくは一緒に参加して活動する仲間がいる、もしくはそういう興味関心のある人同士が交流できる場面があるといいのかとか、あとは先ほどコーディネーターというお話もございましたが、相談ができるアドバイスをもらえるような環境があったほうがいいのかどうかとか、そういうことをお伺いしたいというふうに考えてございます。さらに、前回の委員会でもご意見がありましたが、まちづくり活動に興味関心がある方への情報の届け方についてもとても重要なことだと考えてございまして、そこで仙台市役所のイベントなどについての情報収集の手段として、若者がどういったものを使用しているのか、例えば仙台市の場合は市政だよりなりホームページでは情報は提供しておりますが、そのほかにLINEやTwitter、FacebookというようなSNSを介したのか、もしくはそういったツールではなくて、例えば所属している学校や職場での案内とか、友人や職場の同僚からの紹介、口コミといったところが情報を入手する手段として多いのかどうか、そういう

ったものをお尋ねしたいというふうに考へているところでございます。なお、このアンケートの実施につきましては、より多くの若い皆様にご協力いただけるよう、なるべく短い時間での回答を可能とするために、アンケートの質問数は多くても10問から15問程度に絞って実施させていただきたいと考えてございます。調査票につきましては、各質問項目が固まり次第、委員の皆様に追ってお届けさせていただきたいと考えてございます。

次に、ワークショップの開催についてでございます。ワークショップは、アンケートの単純集計結果を参考にしながら、若者の意見を直接聞く機会を設けまして、調査の充実を図るために実施し、今後取り組んでいく事業をより効果的に展開していくためのヒントにさせていただきたいと考えてございます。実施方法といたしましては、年齢はアンケートと同じく18歳から39歳の方といたしまして、主に市内でまちづくり活動に取り組んでいる方やまちづくり活動に興味関心のある方で、30人程度を対象とする予定です。アンケートの単純集計結果から、さらに深掘りしたい内容を抽出してワークショップのテーマといたしますとしてグループワークをしていただき、アンケートでは拾い切れなかったことなども参加者同士で意見交換やアイデアを話し合っていただこうと考えてございます。

最後に、今後のスケジュールの予定でございます。アンケートは、今月末に対象者宛てに発送いたしまして、8月いっぱいを回答期間として、ご協力をお願いする予定です。その後、単純集計となりますが、9月にアンケートの回答を取りまとめまして、10月中旬の委員会でご報告をさせていただきたいと考えてございます。ワークショップの開催時期については、11月下旬または12月初め頃に開催いたしまして、ワークショップの内容も踏まえた上で調査結果を取りまとめ、2月上旬の委員会ではその結果と、新年度の事業展開の予定をご報告したいと考えてございます。事務局からの説明は以上です。

[高浦委員長]

ただいまの事務局の説明に対し、皆様からご意見、ご質問等を頂戴したいと思いますが、いかがでしょうか。

[小林委員]

根本的な質問で申し訳ないんですけど、目指すものがあんまりピンと来ていなくて、要するにこの調査によって例えばどこかの地域で実際にまちづくりをするようなところまで将来的に期待しているのか、それとも若者のまちづくりへの関心を呼び起こしたり、意識改革とか人材育成的な意味でこういうことをしたいということなのか、その方向性を、次年度以降にどういう展開をしていくか考えるためのまず材料としての調査なのか。何かその辺が聞いていてピンと来なかつたので教えてください。

[事務局（市民協働推進課長）]

今回の実態調査、アンケートとワークショップを開催させていただきますが、これを踏

まえて、来年度以降事業を企画いたしまして、実際に行っていきたいというふうに考えてございます。ただ、今の段階で例えば具体的にどこの場所でというのはなかなか申し上げることはできませんが、例えばそういった若者たちがまず体験というものがポイントになるのであれば、その体験を促すような事業を行ったり、もしくは育成の面から必要であればそういうところの事業というのを具体的に行っていきたいと。そのための実態調査ということになります。

[高浦委員長]

特にまちづくりに関心を持ちながら参加できていない若者層をどう掘り起こしていくのかというところが最大の目標なのかなというふうに思ったりいたしますが、まずまちづくり活動とはどういうものかという定義ですかね。自主的に参加できるものから、町内会活動で半ば順番が回ってきたので致し方なく参加していますといったような活動まで、どの辺まで含めてみていくべきか。それから研究者の視点になると、まちづくり活動に参加した人たちの幸福度合いとか単純な感想でもいいんですけども、参加してどうなのかというウェルビーイングにつながっているようなまちづくり活動とは何かみたいなところも相関が取れると、より興味深いなというふうに思ったりいたしました。

宮城県ですと、みやぎNPO情報ネットというものでどういう団体がまちづくりに関わっているか、どういうボランティアを募集しているかといったことを検索できて簡単でよろしいのかもしれません、もう少し深い情報を取られたいという場合に、こうしたサイトも活用いただければいいなと思うんですが、オンラインでの情報提供の状況というのはいかがでしょうか。さらにもう少し工夫できるものがあるとしたら、市民活動サポートセンターのセンター長いかがでしょうか。

[事務局（市民活動サポートセンター長）]

仙台市市民活動サポートセンターで主にやっているオンラインでの情報提供は、ブログでの情報提供と、それを拡散するためのTwitterをやっております。YouTubeも始めたんですけども、主に反応があるのはTwitterと、Twitterから飛んでくるブログでの情報収集というところがあります。あとは団体の検索となると、みやぎNPOナビになってくるかなというふうに思います。

[高浦委員長]

Twitterで情報を取るにしても、ハッシュタグとか何か、あるいはフォローしていないと上がってこないとか、そういうのはありますか。

[事務局（市民活動サポートセンター長）]

そうですね。Twitterでは、何か特定の分野の、例えば割とマイノリティーの人たちとか、

あとは学生団体を取り上げたときとかだと、その周辺の人たちにツイートが拡散されて、結果的にブログのアクセス数が増えるということはありますので、インフルエンサーではないですけど核になるような人たちが関わってくると、やはり情報が拡散されるということがあります。

[高浦委員長]

アンケートの設問項目を超えて、具体的にどうしたら若者に届きやすいのかみたいなことで質問してしまいましたが、どういうものがあると届きやすくなるかという、そこら辺もより見えてくるとよろしいのかなと思いました。

[佐々木副委員長]

アンケートにつきまして3点ほど、こうしたらよろしいのではないかという意見をお話しさせていただきたいなと思いました。私もアンケート調査というのはこれまでの仕事でもやってきたんですけども、小林委員がおっしゃったようにゴールを明確にしてやっていくというのはすごく大事なところだなというふうに思っております。新たな事業展開までもし考えるとするならばといったところの視点で考えますと、まず具体的にどこからどこまでをまちづくり活動というのかということを具体的に書かないと、その人の認識で大きなズレが起きてしまうのではないかというふうに思っております。意識のある方はまちづくり活動でピンとは来るのですが、ない方にも届くと思いますので、本当はやっていたのに知らないみたいな感じでチェックすると精度が落ちるかなというのが一つあります。あとは、やはりヒアリングを数名でもやられたほうがいいのではないかというふうに思っています。ご本人が顕在的に感じていない潜在的に感じている問い合わせこちらでお出しする中で、潜在的にこういうふうに思っているんだといったところがヒアリングによって結構あらわになっていくかなといったところがあるので、何千人とかやる必要はないので、そういうヒアリングもあるといいのかなというふうに思いました。あとは、若者がどうすれば参加するかといった視点ですと、うまくいってる団体の環境要因といったところもお調べになると施策化といったところでは成功事例みたいなところのポイントが見えてくるかなといったところを感じました。

[高浦委員長]

項目のほうでは阻害要因が上がっていますけれども、持続可能になる要因というところも確かに見えてきたほうがいいですね。それから、ヒアリングはワークショップがそうしたものと兼ねているとは思うんですけども、特に関心を持っているけど参加できていないような人たちに意見を聞けるといいかというところでしょうかね。

[佐伯委員]

ワークショップの開催についてお聞きしたいのですが、対象者30人程度の選び方は公募なのか、それとも活動している団体さんから選ぶのでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

ワークショップの参加者の募集方法についてですが、ワークショップのテーマについてはアンケートの結果に基づいて決めていきたいと考えており、その内容によりますが、公募というところも視野に検討しております。またその募集におきましては、この委員会の委員の皆様に関係者へのお声がけなどを願いする場合もございますので、その際はご協力いただければというふうに考えているところでございます。

[高浦委員長]

公募ですと、すでにもう関心を持って活動をしているような子たちばかりになりそうな気がしますので、あまり学外の活動に関心を持っていないような学生も調査対象になると いいのかもしれませんね。

[高橋委員]

まず質問ですが、3,000人を抽出するという人数の根拠を教えていただきたいのと、回答率をどの程度見込んでいらっしゃるのかということを教えてください。あと提案ですが、情報の届き方といったところで、ハッシュタグを付けるといふとかTwitterだと若者の反響が多いというお話もあるので、皆さんができるだけキーワードだと参加しやすくなるのかといったハッシュタグのキーワードのアイデアを出していただくような質問が入っているといふかなと思いました。若者たちがまちづくりや市民協働などいろんな活動の中で、一言で「応援しあう東北」というハッシュタグでやっている活動があってすごくいいなというふうに思っています、それを若者が拡散している様子なんかもあったんですね。そういうのがすごく重要な視点だなというふうに思っています。

[事務局（市民協働推進課長）]

まず3,000人というところにつきましては、予算上の関係もございまして3,000人とさせていただいております。回答率につきましては、仙台市に居住する18歳以上の男女6,000人を対象にして仙台市が実施した市民意識調査では、およそ3割程度の方がご回答いただいたというような状況でございます。今回の調査につきましては、実際にどのくらいになるかというのは正直見えないところもあるんですが、今回はアンケート調査とワークショップの両輪で把握をしたいと考えてございまして、アンケートで拾い切れなかつたご意見などについても、ワークショップでヒアリングしていかなければなというふうに考えているところでございます。

[岩間委員]

調査対象者を住民基本台帳から無作為抽出というのが少し引っかかっていまして、学都なので住民票を移していない方がいっぱいいるはずなので、郵送で送るというよりはチラシを作つて市内の各大学に広報協力をいただいて、3,000人に満ちたら終わりみたいにするとか、そういうほうがより求めている対象者からの回答率を得られるのではないかというふうに思いました。あとは、まちづくり活動というのが、佐々木委員もおっしゃっているとおり非常に曖昧だなと感じまして、かつ経験の有無というのも、何か団体の名義の下で活動したらいいのか、それとも今はもうSDGsも流行っていますから、個人としてペットボトルを購入することを避けたらいいのかとか、そのあたりが非常に曖昧なので、例えば例示を設けるとか、そういう配慮があるといいのかなと感じました。

[高浦委員長]

メールで流すのであれば費用もかからないかと思いますので、大学のボランティアセンター宛てにメールの周知をお願いしてもよろしいかもしれませんね。それこそインフルエンサーみたいな方にTwitterなどで発信していただければなおさらよろしいのかもしれませんけれども。まちづくり活動の例示は、事務局でお考えがあるようですが、いかがでしょうか。

[事務局（市民協働推進課長）]

まず岩間委員からのご意見につきましては、仙台市外から進学していらっしゃる学生の方で住民票を移しておられない学生の方々には依頼文が届かないという形になります。その部分についてはワークショップのほうで何とかカバーしたいと思っているところでございます。続いて、まちづくり活動の定義につきましては、「社会や地域をよりよくするため、抱える課題の解決やまちの魅力向上に取り組む活動」といったご説明になりますが、若い方々の考え方によって様々ですので、お送りする依頼文に分かりやすい例示を加えた上でアンケートを実施したいというふうに考えております。

[石田委員]

それでもたぶんまちづくりというのはてちょっと広すぎて、どういうまちづくりに関心があるかということを答えてもらうときに、ボランティアとしてのまちづくり活動なのか仕事も含めてなのかということ結構広くて、我々としてはその後の事業のことを考えたら、どんな分野の事業に関心のある人が仙台市の中の若者には多いのだろうかということをきっと知りたいと思うんですよね。関心はあるけれど参加していない人に対しては、阻害要因を見てその阻害要因を克服すると参加できるようになるのではないかといったことや、関心はあって参加している人はそのきっかけは何だったのかといったことを参考に事業を考えるときの戦略を考えるんだと思います。あと参加したけど続かなかった人というのが

もしうまく取れれば、受け入れ側に問題があったのか、環境の問題なのか、個人の都合なのかとかが分かると良いかもしれません。こここの最初のあたりの集計でどういう人たちを対象に事業を考えるのかという基本情報になってくるとは思ってはいるものの、まちづくりの分野が広くなり過ぎると、うまく意見が拾えないのではないかという不安があります。むしろインタビューとかワークショップだけでもっと広く実態調査をしたほうがエンジンになるのかなとか、ちょっと悩ましいところだなと思いました。

[事務局（市民協働推進課長）]

今回のまちづくり活動の定義については、例えばボランティアに限定してしまうと、最近だとパラレルキャリアとして収入も得ながら活動されている場合もあります。そこを除外するのもいかがなものかという考えもございまして、非常に悩ましいところではございました。今回アンケート調査をしていく中で、興味関心のある活動分野についての設問は考えています、NPO法でいう特定非営利活動の分野を参考にしたいとと思っています。あとは、資料には明示しておりませんでしたが、例えばその興味関心のある方がどういったことに期待しているのかというところもお聞きしたいと思っていまして、例えばソーシャルビジネスのノウハウを学んだり実践できる場として期待しているのか、もしくは自分の特技や仕事で身につけたスキルを生かしたいと期待しているのか、もしくは単純に様々な人とのネットワークをつくりたいからなのかといったまちづくり活動に対して何を期待しているのかというところは併せて聞きたいと考えてございます。また、先ほど岩間委員のご質問の中でございました実際に活動されている方の活動の形態といいますか、個人として活動しているのか、もしくは既存の団体のメンバーの中で活動されているのか、もしくは自ら団体を立ち上げて活動されているのかというところも聞きたいと思っています。

[高浦委員長]

まちづくりといっても営利、非営利で簡単に区分けできないところがありますね。ただ、建設業一般は今回のアンケートからは外してもいいのかもしれないですね。何かいい定義といいますか例示が基本にはなってきますかね。

[小林委員]

どの辺のどういう内容を取りたいのかというところを少しよく考えないと難しいかなと皆さんのお話を聞いて思っていました。あまり広く漠然とした無作為抽出に対するアプローチだと、ほとんど返ってこない危険性もあるかなと思っています。例で言うと、我々の団体の会員向けに理事長名でアンケートを出しても返ってくるのが3割ぐらいなので、アンケートに答えたときのインセンティブがあると回答率も一気に上がると思うので、何かそういう仕掛けも一つだと思います。あとはやはりまちづくり活動の定義の部分が結構難しいかなと思っていて、これも環境の部分でしか例示できなくて申し訳ないですけど、大

学生向けに環境の話とか講義をするときに、皆さんのが家の前のごみを拾うことも環境問題の調査研究をすることも全部環境活動なんですよという言い方をするのですけど、そのレベルで良いのであれば広く言えばいいと思いますが、そうすると本当に何でもありになつてくるので、調査の効果を考えたときにそこまで幅広くしてしまうと分析がとても大変になつてしまうと思うのであれば、若干絞って考えるのもありかなと思います。その辺の狙いをしっかりと定めないとばやけてしまうかなというのがちょっと心配になつたので、発言させてもらいました。

[高浦委員長]

まちづくりの定義など、また精査いただければというふうに思います。調査の目的と照らし合わせながらになるとは思いますが、みんなで協働でまちをつくっているというところが伝わるような、こうしたニュアンスの例示などをぜひしていただければと思います。

[事務局（市民協働推進課長）]

確かにまちづくり活動の定義については頑張って検討していきたいと思っているのですが、若者にその活動にトライしていただきたいという思いがございますので、どちらかというと我々役所が考えているようなまちづくり活動よりももうちょっと広いところまでまちづくり活動というふうに定義をして、アンケートを取りたいなと考えております。そういう広く取ったまちづくり活動に、関心があるけれども行動に移せない若い方々がどうそれに関わっていけるかというようなヒント、もしくはそういった方々にどうやったら声が届くのかというようなプロモーションの方法などを、今回の調査の中で見いだしていきたいなというふうに思っているところでございます。

[高浦委員長]

インセンティブは特にないですか。

[事務局（市民協働推進課長）]

インセンティブの部分についても、実は検討いたしましたが、今回若者の方の本音の意見を聞きたいというところがあるので、インセンティブを設けるとなるとどうしても誰が回答したかというのがこちらも分かる状態になっている必要があり、こうしたアンケートは回答を避けるのではないかというような考えもございまして、今回はインセンティブはなしで、あくまで個人を、誰が回答したかというのはこちらでは追わないアンケート調査というふうにさせていただきました。

[高浦委員長]

この種のテーマだと、そんなに意識はしない気もするのですが。それこそ若い人たちに

直接インセンティブについて聞いていただいてもいいのかもしれませんけれども、事務局の方向としてはそういうことだということですね。

お時間になってまいりましたので、また細かいところは個別に事務局とお話し合いいただくということで、ここで締めさせていただければと思います。

3 その他

【高浦委員長】

最後に次第3、その他ですが、事務局からは特にないということでお伺いしていますが、委員の皆さんのはうから何かございますでしょうか。特になれば、以上で本日の協議事項、報告事項、すべて終了とさせていただきます。ありがとうございました。進行を事務局にお戻しいたします。

4 閉会

【事務局（市民活動推進係長）】

高浦委員長、ありがとうございました。以上をもちまして、令和4年度第2回仙台市協働まちづくり推進委員会を閉会いたします。次回は10月に開催を予定しております。本日はお疲れさまでした。—了—

〈議事録署名人〉

高浦 勝舟
[委員長]

豊田 友希
[署名人]